

## まちと公民館の再生に臨む

### 赤平市の人々の挑戦

本誌編集委員会本号担当

昨年二〇〇七年三月、北海道赤平市は財政問題から赤平公民館を休館とした。三階建（一九九九年）の大型施設だった同館は、一九七四年に赤平市ではじめて建てられた公民館だったが、老朽化し、維持費もかかった。そこで二〇〇三年からこの運営を受託していたNPO法人赤平市民活動支援センターは、市から休館を告げられたとき、市財政をおもんばかり、旧施設の存続にはこだわらなかつた。しかし、新たな拠点場所を探し、二〇〇七年四月、旧信用金庫（平屋）を無料で借りて、自分たちの力で、「まちなか公民館“ラビカ館”」を発足させた。

市民活動支援を行う市民団体が、公民館にこだわって、みずから公民館の設置・運営に乗り出すその背景にはどんな「自治」意識があるのだろうか。公民館と自治の関係はどのようなところからえられてきているのだろうか。そのあたりをつかみたい。そんな思いで私たちは自主設置から一年経った「まちなか公民館」を六月中旬に訪問した。

### 「まちなか公民館」とその周辺

JR札幌駅から急行で一時間弱。滝川駅で乗り換え、一時間に一本、一車両の根室本線に乗って一五分。のどかな風景のなか赤平駅に降りると見事な駅舎が待っている。これが二〇〇三年にオープンした六階建の「交流センター」みらい（三二一九六㎡）（貸部屋専門）。財政危機が深刻になる前に着工された。ずいぶん綺麗で、大きな建物です。ねえ」という私たちの感想に、車で迎えにきてくださった神田さんは「これができたとき市民には賛否両論あつたが、現在は喜ばれ大いに活用されている」と語った。

「まちなか公民館」はこの「みらい」すなわち赤平駅舎から芦別方面に国道を歩いて一分。国道沿いにある。特別な改装はなく、信用金庫の雰囲気がある。特別な改装はなく、八㎡、二五㎡の個室、金庫室、四二㎡のフロアをもち、今、金庫室は倉庫、一八㎡の個室は資料室として利用。活動には主に広めのフロアが利用されている。ここは複数団体の同時使用を可能とするため、当初、仕切り壁のないまま区画を設定し、使用区画に依じて使用料を安くした（新年度は区画を撤廃した）。入り口からみて左手前に厨房つきカウ

有志に任されている。左手壁際には、コピー機、パソコンなどNPO所有で、団体の使用に供する機材が並ぶ。

訪問した時には玄関に「そらち炭鉱のまち第一回写真コンテスト入賞作品」群がパネル展示されていた。フロアーの入り口には市民団体作製物品を納めたガラスショーケースがある。地産地消の考えで展示販売している。その上には使用スケジュール表やたくさんチラシが並ぶ。右奥、窓際には炭鉱資料収集保存会所有のパソコン等機材が置かれていた。「まちなか公民館」のすぐ裏には、広い駐車場を構えた文化会館があり、その先には赤平市立図書館が見える。文化会館（三三六二㎡）は一九六七年に建設され、本格的なホールをもつ。炭鉱産業が活発だった頃には多様な文化事業が開催され、周辺自治体からもたくさんの方の観客を集めた。オペラが上演されたこともあった。しかし市財政の問題から冬季休館となり、今年いよいよ通年休館が決定した。市民が実行委員会を立ち上げ、「フィナーレ特別公演」を行うことになり、現代座「約束の水」の上演を次週に控え、この日は久々に開くホールの掃除に大勢の市民ボランティアが集まっていた。この文化会館の一室には

市史編纂室もあったが、冬季休館で史料整理の活動がしにくくなり、大量の関連史料は今「まちなか公民館」の個室に保管されている。

### 事業展開

「まちなか公民館」になり職員無配置、資金繰りの厳しさ等、運営環境が大きく変わったが、講座などの事業はどうなったのだろうか。運営受託時代と大きく違うのは、継続講座の合間に実施してきた「チャレンジ事業」を、今は中心にすえて展開できることだという。二〇〇七年度は、市からの補助金三〇万円（公民館講座費）を活用して「ヒグマを学ぶ」「二ム」の利用を考える講座「散策しながら解説つきキノコ講座」「住吉獅子舞の歴史を学ぶ」「あなたの財布を狙う巧妙な手口を知る消費者講座」「手前みそづくり」「住吉獅子舞を保存・継承する講座」「春のラ・ラコンサート」「赤平市健康づくりフォーラム」の九つを実施した。これと別に、NPO「本体」事業として、他の市民活動事業への参加・協力、外部からの報告依頼への対応などのほか、「住吉獅子舞」の継承への支援、「朝鮮人強制連行遺骨返還」のための募金活動・法要、「中国研修生受入れ」講座を実施。年度末には「庶民の底力」活動を開始し、これは今年度に引き

継がれている。

これらの事業は従来通りNPOの会議で企画実施が決められている。メンバーの得意とする分野が生かされる一方、メンバー外の市民から持ち込まれる課題・アイデアも柔軟に受けとめている。

例えば、赤平市唯一の無形文化財、住吉獅子舞に関する事業は、地元、赤平高校部活動での継承が部員減少によつて困難になつたという話が伝わり、支援のために実施された。「朝鮮人強制連行遺骨返還」関連事業は「強制連行」の歴史を調べている教師から相談を受け、慎重に話し合った末、事業展開を決断した。「中国研修生受け入れ」講座は、受け入れている地元事業者の、研修生に日本の文化に触れる機会を与えてあげたいという願いを受けとめた。なお住吉獅子舞への支援活動はマスコミが取り上げて話題となり、部員が増えて部活動による継承が復活した。

自治体の施策をにらんだ事業も意識的に企画している。「健康づくりフォーラム」は市の「赤平市健康増進計画」の実質化を意図して企画された。「庶民の底力」活動は、二〇〇八年度決算如何で「財政再生団体」に陥るといふ市財政の危機を見据えて発案された「今こ

そ 庶民の底力！ 市民に何が出来るか 私達が出来たことを話し合つてみませんか」と呼びかけた。ここから病院ボランティアなどの活動がすでに具体化されている。

### 「市民活動」支援 はじまりとひろがり

「まちなか公民館」誕生までの流れを遡れば、そのはじめは「市民活動支援グループ」みらい二一」の発足にある。九〇年代末、赤平市役所職員だった二人が職場で回覧された案内を手に自発的に参加した「土曜講座」(北海道町村会が一九九五年から企画実施した北海道地方自治土曜講座)で、「これからのまちづくりは市民が主役。それを具体化するのがNPOだ」との話に感銘を受け、市民としてNPOをつくりたいと考えた。この夢を周囲に語り、九九年三月にグループ発足準備会を開催した。しかし呼びかけに集まった人たちの思いはさまざまだったようだ。現NPO理事長の佐藤智子さんもそこに参加していたが、むしろ「交流センター」みらい」の活用という具体的な提案の方に共鳴した。札幌にいかなくてもこの赤平で大学の講座など、多様な生涯学習の機会をもてるかと思つていたので。

また、グループの活動がはじまった当初、

「いっしょに活動しませんか」という働きかけに、既存市民団体からは「あなたたちが私たちの活動に参加すればいい」という反応だった。公民館についても、受託運営を開始してはじめて、利用者との密接なつながりがうまれ、単なる貸館とはちがう「公民館」の存在が意識されていったようだ。

ところが私たちは訪問二日目に「まちなか公民館」を定期的に利用している炭鉱資料収集保存会の方々にもお話を伺うことができた。炭鉱会社、労働組合、議会を担ってきた方々の独特の関係、活発だった頃の企業と行政との様子、炭鉱閉山の過程と企業誘致の努力・難しさ等々、今日までの市史の一端を伺うことができた。近くの住友赤平炭鉱立坑櫓、住友赤平小学校の旧校舎を利用した赤平市炭鉱歴史資料館にも案内していただいた。財政問題で予定外の施設での展示となつてしまったとの説明だったが、たくさんの教室を活用しての多角的な展示は当時の様子を十分伝えられている。このグループは現在、市史編纂時に収集された史料を活用し、赤平の炭鉱史を写真で構成するDVDの作成に取り組んでいる。既に一つの作品を完成させ、その売れ行きが

よく、収益を、補助金を支出してくれた市と作業場所を提供してくれたNPOに二〇万円ずつ寄付することができた。市民の発案、活動を生かしたこういう資金循環こそ目指したいと神田さんはコメントしていた。

#### 「自治」を体現する真摯な議論

市民活動「共同事務所」の場所確保と抱き合わせではじめた公民館受託運営から、必要性を感じての自主設置へと展開した今もなお、NPOメンバー間で、「公民館」のとらえ方には違いがあるようだ。調理室ほか多様な設備をもつていた公民館がなくなつてみて改めて、多様な活動がそれらの設備に支えられていたことや集まる場所の重要さを痛感したという感想の一方で、施設は学校他の空き施設を使えばいい、肝心なのは自主的な地域活動、「自治公民館」が理想だとの意見も聞いた。

まちの具体的な施策についても当然、メンバー間で意見が分かれる。閉店が増えてきた商店街への大店舗誘致施策が抱える二つの側面（商店街活性化への期待と関連店舗が被る窮地）をめぐり厳しい議論が交わされていた。

「自分が幸せになりたいから、まちをよくしたい」「市民はもつと自分たちで活動していくべきだ」。そんな主張と、具体的な出来事に

素直な疑問をぶつけつつ、さまざまなアイデアを具体化していく活動。これらが交流しながら、「」のNPOは動いているようにみえる。

「団体自治」の機能さえ失いかねない危機に直面している赤平市。しかしそのなかで、これまでの活動によって育まれた信頼関係の下、世代、立場の違う人々が、問題に真摯に向き合い、意見をたたかわせ、活動を展開していく姿には、厳しい情勢の中から育まれる市民「自治」の「みらい」を感じさせられる。そしてそこに「公民館」という言葉が絡まっている。公民館がもつ、「自治」とつながる本来の度量の広さであるうか。この中で、赤平の人々は、これから一体どんな「公民館」を生み出し、提起してくれるのか。その発信に注目していきたい。

NPO理事長佐藤智子さん、事務局長神田隆さん、理事多田豊さん、新出郁子さんと、炭鉱史料収集研究会関係者の方お二人に、六月一日、一日、一日にお話を伺いました。

（文責 荒井容子）